2021年3月21日

中東フリーランサー報告

（第6回）

中東フリーランサー

<u>〈目　次〉</u>

１．いくつかの周年記念日に見る湾岸の現代史

２．ローマ法王の歴史的イラク訪問

３．人類友愛高等委員会と「アブラハムの家」

４．国際レディースデイ（アラビア版）

――――――――＊――――――――＊――――――――＊――――――――

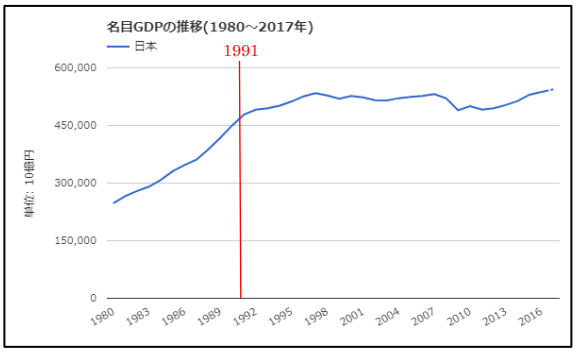
大震災から 10 年目の 3 月 11 日が来ました。10 年前、自分は偶々一時帰国中で、宇都宮駅前で娘達と遅い昼食（餃子）を食べている最中に被災しました。食べかけの餃子に未練を残しつつ、慌てて店から退避したのを思い出します。幸い建物は倒壊しませんでしたが、勘定はしっかりとられました。そこまでは平常でしたが、車のナビ TV の津波の実況に言葉を失いました。911 が米国の転機だとすれば、311 は日本の転機でしたが、どちらも 10 年後の状況は以前の姿には遠く及びません。何故なのでしょうか。たとえば、戦後 10 年目の昭和 30 年の日本はどうだったか。

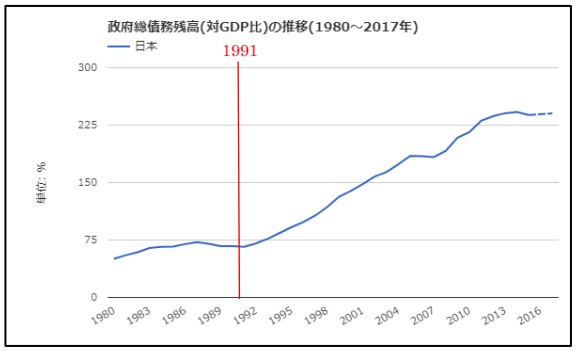
当時築地で幼稚園児だった自分の記憶を辿ると、既に都心に戦争の爪痕は無く、勝鬨橋が毎日開閉していましたが、聖路加病院のしゃれた洋風本館は、手術患者を除き米軍人しか出入り出来ませんでした（だから子供心に手術患者が羨ましかった）。明石町と対岸の佃島との間ではまだ佃大橋が無く、都営の渡し船（無料）が通っていました。

右の写真は昭和 30 年の銀座四丁目です。翌昭和 31 年の経済白書は「もはや戦後ではない」と断じ、前年の国民一人当たりの GNP が戦前のレベルを凌駕した事を強調しました。戦前とは昭和 9～11 年を意味しましたが、戦争を挟む 20 年間の停滞と荒廃の後、空前の高度成長期に突入した昭和 30 年の世の中は、幼時の記憶では、明るく勢いに満ちていました。

翻って現代においてはどうか。次頁図は 1980 年からの名目 GDP と政府債務残高（対 GDP 比）の推移ですが、今から 30 年前の 1991 年のバブル崩壊後、名目 GDP の右肩上がりは止まり、代わりに政府債務残高が右肩上がりとなりました。この状態のまま 2011 年を迎えましたが、その後も大きな変化はありません。震災 10 年後の東北の姿には、悲しみが蘇る一方で、明日の希望が希薄なのは、地域の過疎化だけではなく、この 10 年間に、日本の世界に対する凌駕感とか、突出

感が見当たらないからではないでしょうか。40 年前の英国留学中に、車好きの私は欧州車の設計とデザインの素晴らしさに瞠目したのですが、同時に日本車の品質の圧巻の向上も体感し、それが日本人としての誇りとなりました。今、日本が新たな凌駕感を得られるのはスポーツの世界ぐらいかもしれません。その意味では東京五輪は日本国民に勇気を与えてくれる好機なのかも知れませんが、さてどうなることでしょうか。冒頭から話がずれましたが、過去 10 年間、湾岸諸国の国営石油会社の若手社員に現代日本経済史を講義してきた中で、直近 20 年間での湾岸諸国と日本の経済状況を比較する中で、日本経済の何をフィーチャーしたら良いのかと自問したことを、東北震災 10 周年のTV特集を見ながら、ふと思い出し、一言申し上げた次第です。





1. いくつかの周年記念日に見る湾岸の現代史

さて、今年は 911 と 311 の周年行事の年だけではありません。現代中東史の中では、以下の周年でもあります。

1961 年　クウェート独立

1971 年　UAE・バハレーン・カタール独立（本来はひとつの UAE のはずだった・・・）

1981 年　GCC 設立（革命イランへの対抗軸として）

1991 年　湾岸戦争（ソ連の崩壊→米一強時代の到来）

2001 年　911（中東への直接的影響）

2011 年　アラブの春（民衆の SNS 武装化、為政者の長期独裁安定の時代の終焉）

このように 10 年毎に歴史的なイベントがあったのが偶然であったのか、それとも必然であったのかは断言できません。しかし大雑把に言えば、60 年代は対イスラエル闘争の時代、70 年代はオイルショックに象徴される石油戦略発動とイラン革命、そして 80 年代はイラン革命のアナフィラキシーのような「イランイラク戦争」、90 年代はソ連崩壊と湾岸戦争によるリセットでの米国一強化と中東停滞の時代、そして 2000 年代は一転、資源高騰と湾岸新時代へと続きました。

若い国家群と見られていた湾岸諸国ですが、クウェートは還暦を迎えました。日本史に照らし合わせれば、明治維新の 60 年後は昭和 3 年の御大典の年に当たり、日本はすでに「一流国」の意識を膨満させていました（その関連で、今から 100 年前の 1921 年には、「ワシントン軍縮会議」がありましたね：蛇足）。もはや湾岸諸国にも近代国家としての歴史が積み上がっており、部族社会

的アラブ、働かないアラブ人と言ったステレオタイプの議論は、もう通用しません。あの「ソ連時代」だって、「たったの 70 年間」でしかなかったことを思えば、クウェート独立以来の湾岸諸国の歴史もひとつの時代と見るべきで、それは「石油の世紀」の象徴的存在でした。石油が中東の富を築き、今やその富が「脱石油依存」への国家改造に注がれています。ただそれは、石油の富の継続が前提と言う矛盾したものでもあります。油価はバレル 60 ドル台前半に戻りつつありますが、油価の循環性よりも、石油後の世の中が論じられつつあります。「石器時代は石が無くなったから終わったのではない」との名言を残したザキ・ヤマニ元サウジ石油相が、2 月に亡くなられたのも、なにやら暗示的です。

独立 60 周年と解放 30 周年祝賀のクウェートの花火

（アラブの春 10 周年については、別稿で考察致します。）

2. ローマ法王の歴史的イラク訪問

歴史的な意義から言えば極めて重要なのが法王フランシスのイラク訪問（3 月 5 日～8 日）です。イラクの感涙と、イランの沈黙が対照的でした。パンデミック発生後初の国外訪問先としてイラクを選び、シーア派の最高権威（グランド・アヤトラ）シスターニ師との会談（左図）、三大宗教の祖アブラハムの生地ウルの訪問。クルド地区エルビルを経て、IS 占領時代に破壊され尽くしたモスルを始めとする北部イラク諸都市の訪問と、イラク最大のキリスト教徒居住都市カラコシュでのミサ等、84 歳とは思えぬ精力で、強行スケジュールをこなし、集まった人々に「寛容と調和そして人類の友愛」と言う、佐藤栄作と鳩山由紀夫を合体したような説教をして帰途につきました。コロナ禍に加えて未だに治安の懸念も残る中、敢えてイラクを訪問したのは、単に法王の思い付きではなく、入念に準備された結果であることは、この凝縮した日程に顕れています。

90 歳＋84 歳＝174 歳会談！

法王のイスラム教国訪問自体は珍しいことではなく、既にトルコ（2014 年）、アゼルバイジャン（2016 年）、エジプト（2017 年）、モロッコ・UAE（2019 年）への訪問を果たしています。しかしイラクのキリスト教徒数が、2003 年の米軍侵攻以前のサダムフセイン政権下では 150 万人もいたのに対し、その後の戦争と IS による殺戮と追放の末、今や 30 万人程度に落ち込むと言う、キリスト教

の故地であるイラクの惨状に対し、法王の訪問は極めて時宜を得たものと言えるでしょう。

実は 2000 年にはヨハネ・パウロ 2 世がイラク訪問を企画しましたが、サダムフセイン政権の妨害で断念したと言われています。宗教には関心の低いサダムフセインでしたが、法王の権威が自らの権威を霞ませ、統治に悪影響が出ることを恐れたからでしょうか。これに対して今回の訪問は、イラク政府（バルハム・サーリフ大統領）の招待に応える形で実現したものですが、むしろこれをチャンスにムスタファ・カディミ首相が法王の権威を借りて国内発言力とイランへの政治的立場を高め、混迷する国内宗派・民族間対話のイニシアチブを握ろうとしたであろうことは容易に想像が付きます（同首相のはしゃぎ方を見ても：右写真）。そしてこれは米国にとっても、そして対岸の湾岸諸国にとっても都合の良いものでした。

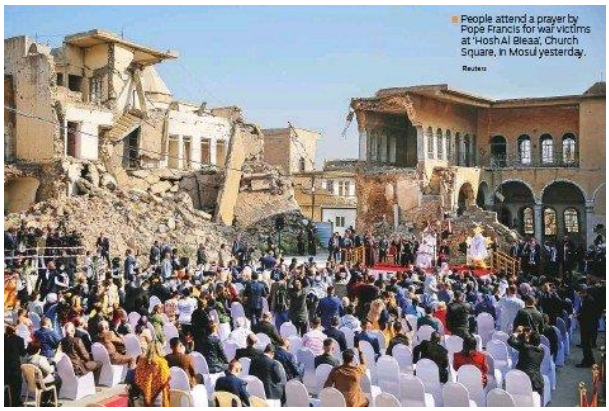
面白くなかったのはイランです（カトリック保守派の中にも、法王のイスラム対話姿勢に不満はあったらしいが）。イランの友人によりますと、イラン国民の関心は高い一方、イラン国内各紙は忖度の塊となり、しかし事実は無視できぬので、殆どが意見も分析も付けずにサラッと報道しました。政治的、武力的立場を持たずに広く尊敬を集めるシーア派の最高権威のシスターニ師を、ローマンカトリックの最高権威が表敬したと報道すれば、ハメネイ最高指導者のご不快を呼ぶだけでなく、一歩間違えれば、イランの神権政治の正統性が揺らぎかねないからでもあります。オンライン紙のイランインターナショナルは各紙の報道ぶりを次のように纏めました。（イランの新聞の多さは、一方で政治論議の多様性も示していますが）

- 改革派各紙（Arman-e Melli、Ebtekar、Shahrvand 等）は法王のイラク訪問のみを伝え、シスターニ師訪問は触れず。イラク訪問が米イラン間の緊張緩和に向けての好影響を期待。その他の改革派（Etemad、Shargh 等）は国内政治情勢に集中し、法王イラク訪問は、６頁、８頁にそれぞれ小さな囲み記事。
- 強硬派（Jomhuri Eslami）は逆に、法王とシスターニ師のナジャフでの面談を小さく報道。
- 保守派（Kayhan、Vatan Emrooz）は、「IS からイラクを護ったのは、米国が殺したソレイマニ将軍とアブーマフディー将軍指導下のイラン支援のシーア派民兵であったことを、法王はご存じか？」と強調。
- 超保守派（Vatan Emrooz）は、ソレイマニ将軍主導の対 IS 闘争のお陰で、法王訪問が可能になったと強調。
- 左翼武闘派宗教者集団（Aftab Yazd）は、法王訪問自体を無視。

Iran Dailies Show Mixed Reactions To Pope's Visit To Iraq, Meeting With Sistani | Iran International (iranintl.com)

と、総じて拗ねた姿勢を示す一方、IS の掃討とイラクの治安回復への「イランの貢献」はしきりと強調しましたが、イラクからの好意的な反応は無く、ミサに雲集した群衆（コロナ対策イマイチ）も法王の法衣姿に感涙するばかりで、イランへの感謝は無かったみたいです。

「ここモスルでは、戦争や対立が悲惨な結果をもたらすことがあまりに明らかになっている。」「文明揺籃（ようらん）の地であるイラクがこれほど野蛮な打撃を被り、古代の礼拝の場が破壊され、何千人ものイスラム教徒やキリスト教徒、ヤジディ教徒らが住む場所を追われたり殺害されたりしたとは、何と残酷なことか」（モスルでの説教：CNN 日本語版訳、写真はロイター）



法王の戦争非難演説がモスルの瓦礫の中で発せられたと言うことは、IS 以前の戦争はカウントされていないと読むべきなのでしょうか。そもそもイラクの荒廃は、80 年代のイライラ戦争よりも、30 年前の湾岸戦争を主因とするものです。それはサダムフセインのクウェート侵略と言う身から出た錆ではありますが、2003 年の米軍侵略となると全くの言いがかりで（その経緯は米国映画「VICE」に描かれている通り）、サダムフセインは始末できましたが、IS の発生も含めたイラクの混乱の責任の大部分は米国にあります。その点、法王の戦争被害に対する糾弾の中に、湾岸戦争以来の米国の責任をどこまで念頭に置いていたのかは明らかではありませんが、バチカンの政治的立場とその影響力を考えると、法王の心中は非常に興味深いところです。

3. 人類友愛高等委員会と「アブラハムの家」

法王の行動は、湾岸諸国からも注目され、ドバイのガルフニュースも連日のトップ記事でフォローしました。もともと湾岸諸国の外国人労働者の中にはキリスト教徒が多く、教会も多いので（クウェートでは出身国別に教会があった）、ローマ教会の動向に関するメディア報道も盛んです。その中で、特に UAE から熱い視線を送っていたのが「人類友愛高等委員会（Higher Committee of Human Fraternity）」でした。私は迂闊にも読み飛ばしていたのですが、フランシス法王が 2019 年 4 月に UAE を訪問した際、スンニー派学究の最高権威エジプトのアズハル大学総長（グランド・イマム）のシェイク・モハメド・エル・ターイブがアブダビに呼び出され、「世界平和と共存の為の人類友愛文書」に、法王と共に署名しました。「人類皆兄弟」的文言は、日本人的発想からは受け容れやすいのですが、開祖「アブラハム」に源を発する一神教同士故に相容れない三大宗教が、教義を乗り越えて妥協することは神学論理的矛盾であるとして、各派からの批判が絶えないものです。しかし、本宣言は、権威の下での政治的行事である一方、あまり実効性は感じられないイベント的なものと受け止められたのか、その後新聞のフォローはありませんでした。しかし、その 1 年後に

は「世紀のアブラハム合意」が実現しました。すなわち、UAE がカトリックとイスラムの融和を演出した後に、今度は UAE がイスラエルと手を結んで「アブラハム・トライアングル」を創出したのです。

この一連の流れを振り返ってみれば、「アブラハム」は単なる語呂合わせではありません。今回の法王のウル訪問は、まさしくアブラハムの生地に詣でることにより、この「友愛文書」を普遍ならしめることへの、法王の強い意図もあったように思えてなりません。即ち、法王の「寛容と調和、人類友愛」のかけ言葉は、単なる「お説教」とは違う、政治的メッセージです。

実はもうひとつ、これは私が知らないだけなのかも知れませんが、この「人類友愛文書」締結を受けてアブダビに設立されたのが「人類友愛高等委員会」で、その年（2019 年）の 9 月に「アブラハムの家」構想を発表しました（下記想像図）。アブダビの新開発都市サディヤット島にオープンされたルーブル美術館（2017 年開館）と、建設中のザーイド国立博物館を背にして、モスク、シナゴーグ、教会が鼎立します。UAE にはユダヤ教徒も 150 家族 3 千人ほどおり（ドバイ日本人会並み）、シナゴーグも 3 か所ありますので、かかる施設自体は異例ではありませんが、この配列順序はなんとも微妙です。設計者はガーナ系英国人の著名な建築家サー・デイビッド・アジャイェ（右写真）で、同建築事務所の HP を読むと、それぞれの崇拝の場が取り囲む中央広場を「交流の場」としています。「アブラハムの家」が目指すところは一体何なのでしょうか。

詳しくはこちら　THE HIGHER COMMITTEE | For Human Fraternity

CNN 紹介記事　Mosque, church and synagogue to share home in Abu Dhabi - CNN

2018 年には、米国大使館のエルサレム移転が強行されました。その翌年法王が UAE 訪問し、

イスラム権威（アズハル大学総長）と対話したことは、トランプへの当てつけのように当時は思えました。しかし、実はその翌年には「アブラハム合意」が結ばれると知っていれば、この一連の動きは別に見えたことでしょう。実際「高等委員会」ボードのユダヤ教メンバーは、ワシントンヘブライ教団の上級ラビ、ブルース・ラスティグ師です。また法王との対話に臨んだイスラム代表はエジプトからであり、サウジアラビアからではありませんでした。すなわち、2019 年の時点で、「高等委員会」を舞台に「アブラハム合意」メンバーが顔を揃えていた訳です（イスラエルは米国が代理）。

これをもって UAE が「アブラハム合意」をテコに米国を巻き込み、湾岸の中心的地位を狙っていた証と見るのか、また法王もキリスト教の存在強化を狙い、「寛容と調和と相互理解」を謳ってこの流れに乗ったのか、すべては推測の域を脱しませんが、「アブラハム合意」を巡る動きには、部外者には知り得ない大きな仕掛けがあり、今回の法王のイラク訪問を激賞した「高等委員会」の発言も、単に表面的賛辞と見るだけでは不十分ではないかと思うのです。これから類推するに、米政権の交代は予定外だったとしても（バイデンはケネディー以来二人目のカトリック大統領だが）、サウジアラビアの「アブラハム合意」参加には、まだ暫く時間がかかるのかも知れません（と言った翌日にあっさり合意、となるかも知れませんが・・・）

4. 国際レディースデイ（アラビア版）

さて、法王がイラクで喝さいを浴びていた 3 月 8 日は国際女性デイ（IWD2021）でもありました。今年のテーマは「リーダーシップを発揮する女性たち：コロナ禍の世界で平等な未来を実現する」（UN Women）です。アラビアンビジネス紙では、今年も「アラブ世界で影響を与える女性たち 2021」の特集が組まれ、多彩な女性陣が紹介されました。

Women of Influence in the Arab World 2021

男尊女卑のように思われるアラブ社会は、サウジアラビアが特異なのであって、社会で活躍する女性は多数います。そのサウジアラビアも MbS 皇太子のリーダーシップで「ノーマル化」が進みつつあります（オラヤン・ファイナンス・グループのルブナ・オラヤン会長のような例もあり）。ただし、イスラムの規範によるヘジャブ（スカーフ）の着用はいまだに一般的で、非モスレム者には女性の圧迫のように見えるかも知れませんが、彼女たちすべてが嫌がっている訳ではありません。ただしこの点はサウジアラビアにも変化が見られ、今やヘジャブをかぶらぬサウジ女性も増えつつあります。一方で中東ファッションの世界では、ヘジャブをデザインとして昇華させようと言う動きも盛んで、良く言えば脱宗教化と多様性が進んでいると言うことでしょうか。「ヒジャブファッション」なるインスタグラムを見ると、なかなかイケてる感じですが（右図）。

「アラブ世界で影響を与える女性たち 2021」も、全員がアラブ人ではなく、飽くまでもアラブ世界に影響を与える女性たちと言うことで、多国籍であり、活躍分野もまちまちで、個人レベルで女性の真のグローバリズムを感じます。TV 広告や新聞のチラシが殆ど無いアラブ世界では、ネットや SNS の普及が著しく、こうした情報インフラに乗った「インフルエンサー」の効果は絶大で、ファッションやリテール分野のマーケティングでは、インフルエンサーの活躍が目立ちつつあり、私がドバイ在勤時には、そうしたインフルエンサーとのリンクを組織し、企業への紹介を仲介する在宅ビジネスのオランダ女性に出会い、驚いた記憶があります（実際のビジネスには出来なかったが）。

こうした中で、正真正銘のアラブ女性で、しかも王族のプリンセスでありながら、ビジネス世界で活躍する女性を紹介しましょう。クウェートのシェイカ・インスティザール・サーリム・アルアリ・アルサバーハ王女です。前頁写真中の赤破線で囲った方ですが、起業家、慈善事業家、作家、映画プロデューサー、コラムニストと多彩な顔を持ち、人道主義者として、健康、環境、教育、女性のエンパワーメント、児童保護、人権等々での支援にも活発な活動をされています。1964 年のお生まれですので、まさに独立クウェート史の中で育ったと言える方です。私も 20 年近く前のクウェート在勤時代に、日本クウェート合同委員会の環境イベントでの昼食会で列席したことがありますが、作業服にバンダナ姿と言ういでたちで、王族とは思えぬ気さくで活発な女性でした。

アブダビのザ・ナショナル紙でも、同王女が立ち上げた宝飾品ブランド「インスティザールズ」が紹介されていますが、環境活動家がプロデュースした作品とは言え、そこはそれアラブ式で、どうしてもキンキラキンになってしまうのは致し方ないところ。それでも健康と美容に留意したコンセプトで、ダイヤモンドは控えめの、お品の良い仕上がりになっているようです。記事で紹介されたブレスレットは、中央に香料を収納する化粧ケースがあり、そこから微香を長時間放出すると言う仕掛

けもあるのですが、実はそれ以上に驚いたのは、インスティザールズのコンセプトが、「水からの伝言」で一時著名になった江本勝氏の理論を採用していることです。江本氏は同じ水でも「ありがとう」と呼びかけ続けると良質の水になり、「ばかやろう」と呼びかけ続けると腐敗すると言う、いかにもと言った感じの理論をもとに、体内の「波動」を測定できると言う「波動測定器」を輸入販売していた御仁（故人）ですが、王女はこの理論に深く「帰依」し、宝飾品を通じて良い言葉が肌に接すれば、体内の水分（体重の 60%）を浄化できるとして開発したのがこのイスティザールズと言うシリーズです。表面にはコラーンの章句などのアラビア装飾文字が彫刻されていますが、こうした装飾宝飾品はアラビアでは一般的なので、あまり特別な印象は与えません。しかし江本理論のお陰で、「心身ともにスッキリよ！」と言うシェイカ・インスティザールの触れ込みです。

私も東レ RO 販売を通じて、水の物性の不思議については随分聞かされました（例えば密度が摂氏 4 度で最大になる等）。そうした水の特異性の起源については、今から3年ほど前に東京大学生産技術研究所の田中肇教授が研究論文を発表されていますので、どうしてもと言う方はこれをご覧ください（英文です）。https://www.pnas.org/content/pnas/115/15/E3333.full.pdf
江本理論は、これとは全く別物で、凡そ同意は難しい内容なのですが、なんか呪術的な響きがあり、米国でも著書がベストセラーとなり、一時は小学校の授業にまで採用されて物議を醸したそうです。ただし、イスラム世界ではコラーンの章句は神の言葉であり、これは信者にとっては有難いものですから、インスティザールズならば霊験あらたかなのかも知れません。ご興味がある方は、同製品の下記 HP をご覧ください。ここにも「言葉の力」と題して、江本理論が縷々解説されており、泉下の先生もさぞやお慶びの事と存じます（2014 年没）。
Power Of Words — Intisars

と言うことで、アラブ世界の各方面で活躍する女性は増えつつある模様で、今後が楽しみです。シェイカ・インスティザールの御令嬢シェイカ・ファーティマも「カラーセラピー」を学ばれ、「プリズモロール」と言うスキンケア商品を上梓されています（左写真）。なんとも活発な母娘で、どちらもヘジャブはしない派です。お嬢さん芸と言ってしまえばそれまでかも知れませんが、王室女性自らがビジネスフロントの先頭に立って女性の仕事を創り上げていく姿に、湾岸アラブ女性の未来をリードするエネルギーを見る思いがして、陰ながら応援したくなるのですが、皆さまは如何でしょうか。

以上